

自由研究発表 10月11日(日) 【午前の部】 ① 9:00～ 9:30 ② 9:40～10:10 ③10:20～10:50 ④11:00～11:30 ⑤11:40～12:10							
教室	発表時間	発表タイトル	発表者	所属	研究/実践	発表概要	司会者
第1室	①	小学校外国語活動の経験の程度と英語発音について	大嶋秀樹	滋賀大学	研究	研究は、小学校外国語活動の経験の程度により、その後の英語の発音の到達度と意識の違いがみられるかどうかを明らかにすることを目的とする。そのうえで、小学校外国語活動の量的経験の違いが、その後の英語の発音にどういった影響を与えるか論じる。研究からは、小学校当時の英語教育の経験の程度の違いが、その後の英語の発音の実態に影響を与えていたことが明らかになった。	古家貴雄
	②	緊張母音とゆるみ母音の音響音声分析ーへボン式ローマ字長音表記への疑問からー	岡本真砂夫	姫路市立八幡小学校	研究	「プール」と「ブル」等、カタカナ表記した際長音が入る単語と入らない単語のペアを作成し、英語母語話者、日本人英語話者の音声録音した。Praatを用いて母音長、フォルマント等を比較し、調音点を推察した。英語母語話者の音声からは、ペアにおけるフォルマントの違いが観察される一方、母音長の差は少なく、異なる母音であることが確認された。緊張母音はゆるみ母音より調音点の変化が大きいが観察された。	
第1室	③	英語音声指導における口形を「見る」態度の育成の効果ー高学年児童の注視時間・英語能力・意識の変化ー	河合裕美 高山芳樹 松尾理恵	神田外語大学 東京学芸大学 船橋市立船橋小学校	研究	公立小学校5年生に英語音声指導の際に口形を「見る」傾聴姿勢の態度育成と明示的な音声指導を行い、英語能力の上位・下位グループで(1)発話者の口形への注視時間、(2)英語能力、(3)英語学習に対する意識が、事前・事後で変化するかどうかを検証した。その結果、発話者の口形への注視時間が増え、英語能力や英語学習の意識が向上した。特に、下位グループの英語能力の音韻認識と発音能力がともに有意に伸びた。	佐藤玲子
	④	小学校外国語活動に資する英語音声指導マニュアル『Let's Try! 1・2』準拠の内容と発音動画の提示	上斗晶代 西尾由里 戸井一宏	県立広島大学 名城大学 広島市教育委員会	研究	小学校外国語活動の発音指導を支援するため、『Let's Try! 1・2』(LT1・2)に準拠した英語音声指導マニュアルと英語ネイティブの発音動画を作成し、提示する。『LT1・2』のデジタル教材の音声分析に基づき、『LT1・2指導編』の「言語材料」の語・文を中心として、発音方法と指導のポイント、及び日英語音声の違いなどの解説を記載した。適切なリズムの実現に繋がる音節の指導を学習初期段階から導入した。	
	⑤						
第2室	①	コロナ禍におけるICTを活用した授業実践での子どもの学び～教育アプリFlipgrid活用の成果と課題～	中村 香	国立大学法人東京学芸大学附属小金井小学校	研究	本研究は、コロナ禍におけるICTを活用した実践授業での子どもの学びを中心に分析・考察をした。その結果、教室以外でも「主体的に学ぶ姿」や「子ども同士の学び合いを楽しむ姿」が見られた。さらに、子どもの英語表現や非言語表現がより相手を意識し伝わるように向上している姿も多く見られた。このことから、ICTを活用することによる、子どもたちの英語での言語活動による学びの可能性と、そのための課題を検討する。	伊達正起
	②	小学校英語におけるビデオ通話を活用した国際交流	小林翔 古屋雄一朗 中川右也	茨城大学 つくば市立吾妻小学校 三重大学	実践	本実践研究では、公立小学校6年生34名を対象としたビデオ通話を活用した国際交流の取り組みが、どのように参加児童のスピーキング力とコミュニケーションを図ろうとする態度に影響を与えたかを考察する。心理尺度アンケート、自由記述アンケート、スピーキングテストのデータを分析した結果、繰り返し行うことで、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成やスピーキング力の向上に効果がある可能性が示唆された。	
第2室	③	大規模学級におけるICTを活用したプレゼンテーションの試み	鶴田昭彦 大槻友紀	多摩市立南鶴牧小学校 多摩市立南鶴牧小学校	実践	コロナの影響で活動に制限がある中、特に大規模学級の発表に要する時間についての苦慮の声が多い。そこで、ICTを有効活用し時間を短縮した発表活動を実施した。Butler (2015)の言うdigital nativeである児童にとつてのICT機器取り扱いに関する感想を得るとともに、実践者の負担についてもインタビューをした。本実践は時間的効率のみならず、児童の学びに向かう興味を引き、個に応じた学習の環境を作る可能性を見据えた試みである。	松本祐子
	④	小学生にSwimmyは難しいのかーICTを活用したスピーチへの取り組みを通してー	今井麻紀	東京学芸大学 教職大学院	実践	小学校英語教育において絵本は有用であるが、国語科で扱われている『スイミー』の英語版は授業で扱うことが難しいと言われている。本研究では、小学生の、ICTを活用したスピーチ活動における児童の発話分析を通して、小学校英語教材としてのSwimmyの可能性を探る。	
	⑤	児童によるiPad用アプリ「くまた」を用いた英語表現活動	太西恵美子 須曾野仁志	松阪市立松江小学校 三重大学	実践	小学校で大切にしたいのは「話したい・書きたい」思いに通じる表現活動であるが、実際は課題が多い。本研究では、iPad用ビジュアルスピーチ作成アプリ「くまた」を活用し、児童の表現活動がどのように可能になるのかを明らかにする。2019年9月より松阪市A小6年生18人の学級でムービー作成の実践を進めたところ、どの子どもも各々の課題に応じて表現活動を楽しみ、2か月後「難しいと感じているが、好きである」と児童の意識は変化した。	

第3室	①	「読むこと」「書くこと」の言語活動 ワークシートの使い方の工夫の提案	小竹 空翼	啓明学園初等学校	実践	読むこと」「書くこと」の指導も機械的な練習ではなく、意味のやり取りを伴う言語活動としたいが、毎回カード作りのような手の込んだ活動を行うのは現実的ではない。そこで、より手軽にできる方法として、ワークシートの使い方を工夫して自己表現につなげる実践を行った。工夫の方法として、1) あてはまること型、2) 誰かのこと型、3) 質問型、4) 正しいこと型、5) これだと思ふこと型を提案する。	立松大祐
	②	聞くことを通して、考えの再構築を促す外国語の授業実践 -児童の心を耕すための教科横断的指導-	乗富智子 滝沢雄一	金沢大学附属小学校 金沢大学	実践	本発表では、小学校5年生を対象とする、教科横断的な指導を取り入れた、単元「Who is your hero? 私のあこがれの人」の授業実践について取り上げ、学級担任として子どもと向き合う中で感じた子どもへの願いに基づいた単元設定や考えの再構築を促すために行った聞くことの活動を中心に、実践の内容、及び成果と課題について報告する。	
第3室	③	最少時数の移行内容に取り組んだ子どもたちの今 ～My English Passportからわかること～	鈴木由季子	尾張旭市立東栄小学校	実践	我が市では、移行期に最少時数で移行内容を取り組み、6年生は5年生までに65時間の外国語（活動）を履修した。最少時数での履修だったため、新しい教科書の内容の理解や活動に困難が生じることもある。本実践では、児童に対するCan-Do方式による調査をもとに、最少時数で移行期を過ごした児童の習熟度を把握し、それを踏まえた授業の実践について報告する。	横川博一
	④	小学校英語における帯活動の効果 ―What am I? クイズを題材にして―	松井佑太郎 折橋晃美	野沢小学校 野沢小学校	研究	本研究の目的は、小学校英語における帯活動の効果を探ることにある。有意的ドリルからCommunicative Practiceへの発展を目指したWhat am I? クイズを題材にして、子どもの発話動機を促せるように帯活動を設定した。活動の様子を撮影し、分析した結果、質問文の質の向上が見られた。また、子どもの振り返りからは、この活動が発話動機となり得ることが推察できた。クイズ活動は効果的な帯活動になりうる。	
	⑤	6年生の単元『Welcome to Our School』の実践報告 専科教員による教科書を用いた授業作り	小林哲也 酒井英樹	小山小学校 信州大学	実践	外国語の教科化に伴い、筆頭発表者が勤務する長野県須坂市の小学校で、1学期にどのような授業実践を行ったのかについて紹介する。当日は、授業ビデオや児童の振り返りをもとにしながら、成果と課題について分析した結果を報告する。	
第4室	①	自分の考えや気持ちを伝え合う外国語・外国語活動―指導者が「やり取り」の重要性に気付くとき―	福原史子	ノートルダム清心女子大学	研究	目標表現を反復練習し、ネイティブに近い発音で正確に話すことを目指した指導から、自分の考えや気持ちを伝え合う指導への転換を図ってきた。学級担任とALTとのTTで「やり取り」を重視した指導ができるよう研修を積み重ねる中で、児童の変容を見取り「やり取り」の重要性に気付く、必然性を創出しようとする教員が増えてきた。一方で戸惑いを感じている教員もいる。そこで「やり取り」に関する指導者の認識について追究した。	猫田和明
	②	児童の発話における誤り、教師の訂正と児童の修正 ～小学校6年生の教室での教師と児童とのやりとりの観察から～	前田康二 角谷尚希	奈良教育大学 新庄小学校	研究	本研究は、小学校の外国語科・外国語活動の授業において、児童の発話に見られる誤り、教師の対処、児童の気づきと修正について明らかにすることを目的とする。小学校6年生の4学級の授業において、教員と児童の1対1の会話の観察から見て取れる誤りが何に関するものなのか分類し、それぞれの誤りに対して教師が訂正をしたかどうか、訂正した場合はどのような種類の口頭訂正フィードバックを用いたか、児童は訂正に対してどのように反応したか、これらの誤りについて後日の授業において修正が見られたかそれとも誤りが繰り返されたかを分析した。児童が誤りに気づき、修正をするためには、暗示的訂正よりも明示的訂正が有効である可能性が示唆された。	
第4室	③	英語の歌を活用した「読むこと」と英語の音韻的構造の指導―音楽教育と英語教育の融合―	高橋美由紀 柳善和 山内優佳	愛知教育大学 名古屋学院大学 広島文化学園大学	研究	英語の歌の指導における文字の有効性と英語の音節（シラブル）や英語の音韻的構造（プロソディ=イントネーション、リズム、アクセントなど）を学習者に意識させる指導の効果について、『Twinkle, Twinkle, Little Star』を活用して実証研究を行った。この歌に馴染みがあり、英文を読むことができる高校生に、(1)英文だけ見て歌う、(2)ボケトークを3回ほど聞いて発音練習した後歌う、(3)英語の音韻的構造を意識したメロディーに変えて歌う、の3通りを行ってもらった。その結果、学習指導要領の「読むこと」の目標には、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を理解することが大切であると書かれているが、音声での慣れ親しみだけでなく、文字を提示し、英語の音節や英語の音韻的構造を意識させることが重要であることが分かった。	中村香恵子
	④	ピクチャーカードを見る児童の眼球運動分析―発音の有無・絵と文字表記の位置関係・学年が視覚英単語処理に与える影響―	畑江美佳 門田修平 湯地宏樹	淑徳大学 関西学院大学 鳴門教育大学	研究	綴りのあるピクチャーカードを見ている時の、文字を追う児童の目の動きを眼球運動測定器で測定し、その特徴から科学的に初期リーディング指導の適期を明らかにし、さらに適切な指導法の手がかりを探ることを目的とした研究である。調査の結果、発音の提示をしない方が、文字への注視回数も時間も上回る。英単語でも絵でも、上にあるものをより多く長く注視すること、4年生以降文字への注視回数が増えることが明らかになった。これらの調査結果から、文字への注意が大きく増大する時期を逃さず文字指導を開始すること、さらに「読む」技能を伸ばすことを目的とする場合、音声と文字の提示のタイミングをずらすことや、ピクチャーカードの上部に綴り字を印字することの重要性が示唆された。	
	⑤	児童の英語語彙知識の習得過程 ―多角的語彙習得モデルの再考―	金山 幸平	北海道教育大学	研究	2000年代初期より、英語の「音声」「意味」「文字」の3素性から成る多角的語彙知識モデルが小学校英語教育では提案され続けてきた。本研究では、多角的語彙習得モデルに基づき、児童の英語語彙知識習得過程を検証することにした。その結果、児童のような英語初学者には主に3つの語彙習得段階があることが明らかにされ、また、多角的語彙習得モデルだけでは説明できない事象も観察されたため、その妥当性についても言及する。	

第5室	①	小学校英語における望ましい指導者についての意見と関連要因についての調査	萬谷隆一	北海道教育大学札幌校	研究	本研究は、小学校英語教育における望ましい指導形態として、担任教師、専科教師あるいはティームティーチング(TT)が良いかについての教師の意識と、その意識に関連する要因を探る。北海道内の小学校教師に対し、質問紙調査を行い、指導者として専科教師・担任教師あるいはTTについての意見の傾向と、経験年数、専科・担任の立場、英語自信度、授業の重視点との関連性について分析した。	太田かおり
	②	小学校外国語科における6年生児童のつまずきの実態：専科教員及び学級担任を対象とした調査結果の分析	川合紀宗 松宮奈賀子 大谷 みどり	広島大学 広島大学 高根大学	研究	小学6年生の外国語学習におけるつまずきの実態及び傾向を把握するため、中四国4県の小学校で外国語科を担当する学級担任または専科教員を対象に調査した。その結果、外国語を学習する上で、音韻認識や長期記憶、短期記憶に関わる技能に困難がある児童の割合が高かった。一方、教科横断的な困難を示す児童の割合は少なかったが、こうした児童は外国語学習に関わる技能でもつまずいている可能性が高く、更なる分析が必要である。	
第5室	③	外国語教科化における担任の不安状況を探る ー教科化前と教科化後の意識調査に着目してー	佐藤裕子	東京学芸大学連合大学	研究	本研究の目的は、小学校外国語教科化における担任の不安を調査し、担任が外国語授業を進めていくための不安を軽減する授業形態を提案することにある。研究参加者は、千葉県にあるA市の小学校54校54名の英語主任である。教科化となった外国語を指導するに当たり不安に思うことについて、1) 指導内容、2) 指導体制、3) デジタル教材の3点に焦点を当てて、授業開始前2020年4月にアンケートと自由記述を用いて調査を実施した。授業開始後8月に同様の調査を行った。具体的な課題を明らかにし担任の不安を軽減するための方策と外国語授業を進めていくための授業形態を提案する。	上原明子
	④	英語にカタカナを振ることに対する小学校教員の意識	田中真紀子 河合裕美	神田外語大学 神田外語大学	研究	小学校英語教科化を目前にした小学校教員が、英語を「読むこと」の指導において、カタカナを振ることをどのように考えているのか、教員の英語の読みに関する知識、および指導の実態と合わせてアンケート調査を行った。教員がカタカナを振ることを許容する背景には、教員自身の英語の読みの知識や発音に関する自信の欠如が見られることから、文字の読み方や発音を研修に取り入れることが必要である。	
	⑤	ALT研究の盲点？小学校で活躍するバイリンガルALTたちの現状と課題	PEARCE Daniel Roy	京都ノートルダム 女子大学	研究	政策文書でALTはモノリンガルの英語母語話者と描写されているが、非英語母語話者のALTが増加している。先行研究は母語にのみ注目してきたため、それだけではバイリンガルALTの研究としては不十分である。バイリンガルの言語使用や習得の経験は、モノリンガルと根本的に異なるためモノリンガルALTとは異なる形で外国語教育に貢献できると考えられる。本研究の目的はバイリンガルALTが抱えている課題を明らかにするとともに、彼らの知識や経験をいかに授業に活かすかについて考察する。	
第6室	①	CAN-DOリストを用いた到達目標の明確化 ～小中連携したコミュニケーション能力の育成を目指して～	大槻友紀	多摩市立南鶴牧小学校	研究	小中間のスムーズな接続のためにCAN-DOリストのような到達目標の作成が効果的であると言われている(金森, 本多, 泉, 2017)。さらに、当該学年の既習内容や学びのつながりを把握することが可能となり、学年間、学校種間の連携に役立つと言える。本研究ではコミュニケーション能力の育成を目指したCAN-DOリストを作成し、53名の現職教員の協力を得て記述文や難易度を調整した。現職教員が使いやすいCAN-DOリストの作成が本研究の目的である。	山口美穂
	②	学習に関する自己調整を促す振り返りレポートの実践 ～5年生 友だち紹介レポート動画の作成プロジェクトを通して～	高田実里	熊本大学教育学部附属 小学校	実践	「学習に関する自己調整」は、「主体的に学習に取り組む態度」の一側面として重要であるだけでなく、コミュニケーションの学習において自分の思考過程や学習過程を自覚化することが学習を深めたり発展させたりすると考える。小学校外国語科の具体的実践を通して、「学習に関する自己調整」を促す振り返りの在り方を模索したい。	
第6室	③	児童の話すことへの意欲を高めるパフォーマンス評価	岡崎浩幸 清水義彦	富山大学 富山県立大学	研究	本研究は小学校5年生を対象に、学習評価の一環として実施したパフォーマンス評価が海外交流を通して培った児童の話す力を測るのに適しているのか、とその評価活動が児童の学習やコミュニケーションへの意欲向上に寄与するか、を明らかにすることを目的とする。	志村昭暢
	④	「思考力・判断力・表現力」の涵養に関する試案 ーパフォーマンス評価を想定してー	廣江 顕	長崎大学言語教育研究 センター	研究	本発表では、パフォーマンス評価を想定し、「聞く力」と「話す力」を中心とした、ALTを活用した「思考力・判断力・表現力」を涵養する言語活動を提案する。	
	⑤	Let's Try! におけるCan-Do及びパフォーマンス評価試案ー外国語活動における思考・判断・表現を伴う活動設計	長沼 君主/泉 恵美子/俣野 知里/加藤 拓由/楠井理恵/大田 亜紀/山川 拓/アレン玉井光江	東海大学/関西学院大学/京都教育大学附属桃山小学校/岐阜聖徳学園大学/昭和女子大学附属昭和小学校/別府大学短期大学部/京都市立九条塔南小学校/青山学院大学	研究	本研究ではこれまでCan-Do評価に基づいたタスク設計に取り組んできており、We Can! の活動をベースとした3つの資質・能力に基づくパフォーマンス評価のための観点別ルーブリック開発の試みも行った。外国語活動でも、評定こそつけないが、観点別に記録に残す評価を行う必要がある。そこでLet's Try!の活動を対象として、Can-Do評価と思考・判断・表現を伴うタスク開発を試みた。実践事例とともにCan-Do尺度に基づいた活動とパフォーマンス例を紹介する。	

第7室	①	未就学児における英語文字への関心・定着の可能性 -期待される小学校における文字導入・学習の準備-	佐藤久美子 橋元知子	玉川大学大学院 明治大学大学院生	研究	幼稚園での英語学習は主に単語を反復したり、歌を歌ったりする活動であったが、小学校で文字が3年生から導入される準備として未就学児で文字や単語を導入することで、文字・単語力の上昇が期待できることを調査した。1年間幼稚園で毎日10分の英語学習を行い、事前・事後テストから、文字や単語に関わる問題で統計的に有意な伸びを示し、保護者のアンケートからも文字に特に関心を持つようになったという結果が得られた。	本田勝久
	②	ローマ字学習と外国語学習に役立つ文字指導の工夫	榎本はる	天理市立前栽小学校	実践	本研究では、中学年に合った効果的な文字指導法を工夫し、外国語活動における聞く活動を中心とした文字指導をローマ字学習に役立てるとともに、ローマ字を読む活動が外国語学習にも役立つか試みた実践を報告する。小学校3年生の外国語活動の授業において毎時間1文字を扱い、「大文字・小文字」「音読み・名前読み」「音を探す」「音をつなげる」活動を多感覚指導を取り入れて行った後、ローマ字学習で名前をあてる活動を通してローマ字への気づきを共有した。	
第7室	③	エビデンスベーストの英語の読み書き -小学校外国語科を支える10回パッケージ文字指導の提案-	柏木賀津子 山下桂世子 北野ゆき 鈴木渉	大阪教育大学 アシュブルック小学校 守口市さつき学園小学校 宮城教育大学	研究	初等教育段階の読み書き指導の「質」がその後の読みに影響することを踏まえ、本研究の目的は、英語の音と文字の綴りに関する理論をまとめ、日本語の児童が、初めて英語の文字に出会い、英語絵本を読むようになるまでの「15分×10回」の指導手順を開発し（10回パッケージ：10P）、そのICT教材を開発・普及させることである。10P試行テストから問題の所在を明らかにし、JES課題研究（2020-2021年）で得るエビデンスに基づきその効果を検証する。	
	④	母語の語彙ネットワークを用いた小学生のL2語彙学習 -絵本の読み聞かせ活動を通して-	田中菜採 佐藤彩香	山口県立大学 大穂町立大穂学園	研究	初學者の語彙学習では、英単語を単独で覚えるよりも母語の意味的関連性の強い語とペアにすると覚えやすい。本研究では、音声と絵をもとにした学習において、どのような意味的関連性（シンタグラマティック・パラダイグマティック条件）を利用すると、小学生が単語の意味を習得しやすいのかを検証する。授業では、各条件において目標語を含んだ絵本を、教師がリズムチャンツを用いて読み聞かせることで、語彙学習を行った。	東悦子
	⑤	小学生のための語彙リストの開発：検定教科書共通の重要語彙を選定する	佐藤 剛	弘前大学	研究	本研究は、小学生に共通して指導すべき英語の語彙を選定するものである。具体的には佐藤（2016）の「小学生のための語彙リスト」に検定教科書7社分の言語データを加えることで、検定教科書の語彙の傾向を反映した647,754語からなるコーパスを作成・リスト化した。開発した語彙リストは教科書が異なっても共通して指導すべき語彙の指標として、小学校外国語の語彙指導における有効な基礎データとなることが期待される。	
第8室	①	第二言語習得のための遠隔異文化間交流の再考：言語習得の場とするための視点と実際	佐々木雅子	秋田大学	研究	本研究は、小学校外国語教育における遠隔異文化間交流を再考する。1) 遠隔異文化間交流により言語習得を促進するための視点を提案し、2) 過去の遠隔異文化間交流における特徴を見つめ出す。こどもの母語習得におけるインタラクションの効果及び第二言語の初期学習者のインタラクションについて文献を調査し、オーストラリアと日本の小学校6年生の遠隔異文化間交流におけるインタラクションを分析する。	山本玲子
	②	大学生が小学生を支援するパラリンピックをテーマとした学び -国際協働学習を推進するNGOのTokyo Youthの活動として-	坂本ひとみ 滝沢麻由美	東洋学園大学 東洋学園大学	実践	本発表は、パラリンピックをテーマとした小学生の英語活動において、学びの目標をSDGsと関連づけたCLIL授業の実践報告である。世界の小中高生が活動するNGOであるiEARNの日本センターのTokyo Youthとして、大学生が小学生の学びを支援する形をとり、海外に向けて英語で応援メッセージを発信することを授業のゴールとした。児童も大学生もともに、学習指導要領の3つの柱に沿った学びの意欲や思考力、協働力が高まることを目指した実践研究である。	
第8室	③	小学校英語における複言語教育 多言語教材「コトバハカセ」を用いた実践	大山万容 北野ゆき 濱田隆史	立命館大学 守口市立さつき学園 ギフトエンディングス 株式会社	研究	小学校外国語教育では、英語を取り扱うと同時に、英語以外の言語・文化をも含む教育活動によって、言語や文化の多元性により開かれた態度を育成しようとする試みが、これまで多くの実践者や研究者によってなされてきた。これらは複言語教育、あるいは教育の複言語的アプローチと呼ばれる（大山、2016）。2020年の新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、「向かい合って話してはいけない」「できるだけ声を出さないように」など、小学校外国語の授業は大きな制約を受けた。2020年5月、分散登校中の公立小学校において実施された高学年の外国語の授業の中で、発表者の一人は、日本の学校における代表的な異言語（英語、中国語、韓国・朝鮮語、タガログ語、ポルトガル語、ベトナム語）を学ぶことができるよう開発された多言語教育アプリ「コトバハカセ」(https://gift10.net/app/kotobahakase/) を利用して、ICTを用いた複言語教育を実践した。この発表では、その実践と、児童の言語についての学びを報告する。	
	④	韓国の子ども英語図書館から日本が学べること	カレイラ松崎	東京経済大学	研究	韓国政府は所得による格差から生まれる英語力の格差をなくすために、様々な対策を行ってきた。それらの対策の一つとして子ども英語図書館があげられる。そこでは英語の図書を提供するだけでなく、キャンプや英語講座などの体験活動を無料または廉価で提供しており、韓国の子ども英語図書館は児童の英語力向上という観点で大きな役割を果たしていると思われる。本発表では韓国で最も大きい子ども英語図書館である「釜山広域市立中央図書館別館釜山英語図書館」の現状を調べ、日本に示唆を与えていくことを目的とする。	川村一代
	⑤	相手意識を持って地域の良さを発信する授業の実践留学生とのビデオでのやりとりを活用して	坂根大雅 大谷みどり	吉賀町立柿木小学校 島根大学	研究	相手意識を持ちながら地域の良さを発信するための手段として、ビデオでのやりとりを活用した。6年生の「I like my town.」の単元で、島根大学の留学生2人に吉賀町の良さをPRするための動画を作成し、見てもらうことを単元のゴールとしたところ、ビデオのやりとりが複数回往復した。児童の振り返りを丁寧に見取りながら分析したところ、目的意識、相手意識、スモールステップの学習展開が、児童の意欲の高まりにつながったと考えられる。	

第9室	①	英語模倣発話に観察される小学5年生の統語発達	江口 朗子	名古屋女子大学短期大学部	研究	模倣発話タスクは、第二言語習得研究の領域では、言語産出能力が未熟な学習者に内在する文法知識を測定できるとされる。本研究では、小学5年生67名に、模倣発話タスク、語彙サイズテスト、デジタル・スパンを実施した。その結果、模倣発話は語彙サイズと相関が高かったことから学習者の言語知識が反映されているといえる。模倣発話により、語から句、句から文の構造へと統語知識が発達する過程を観察できる可能性が示された。	巽 徹
	②	小学6年生の1年間における児童の文法知識の発達—プレハブ表現の可変部に関する知識に着目して—	内野 駿介	北海道教育大学	研究	小学5年生と6年生の2月に文法性判断課題と空所補充課題を実施し、同一の児童の文法知識の発達について調査した。調査対象はwhatで始まる疑問文とwant, want to, want to beを含む文であり、文中の入れ替え可能な語に関する知識を問うた。分析の結果、児童の文法知識は小学6年生の1年間で発達しており、特にwhatに続く名詞とwant to beに続く名詞に関する知識が著しく発達した可能性が示唆された。	
第9室	③	英作文創出につながる小学校期における語彙指導—中学校期における語彙がもつコア・イメージを活かした語彙指導の実践結果が示唆するもの—	川添 明子	長崎大学教育学部附属中学校 (長崎県)	研究	本研究は、中学校期における英作文創出につながる語彙指導、及びその定着を図る指導の効果について報告するものである。演繹的で明示的な指導を見直し、生徒の気づきと語彙がもつコア・イメージを活かした認知力活用型アプローチによる指導を実施し、その有効性を検証している。調査項目を動詞とし、人主語文に偏らず、無生物主語文の用例を追加提示する手法で、限定的だった動詞の意味と用法の理解を改善することをねらいとした。	丹藤 永也
	④	チャンツは児童にとって難しいのか? : 初回提示直後と練習後の復唱を比較して	川井 一枝 鈴木 渉 栄利 滋人	宮城大学 宮城教育大学 仙台市立国見小学校	研究	本研究の最終目的は、「チャンツ」の役割を検証・考察し、効果的な指導法を提案することである。本発表では、初回提示直後と練習後における児童の発話量を比較検証した。結果から、多くの児童にとって提示直後のチャンツは復唱が困難であること、しかし短時間の練習で発話量が大きく伸びる可能性が示唆された。当日の発表では、児童の様子等も合わせて報告する。	
	⑤	日本の小学生の英語学習における学習方略と英語運用能力の変化～アウトプットの機会に接した児童に焦点を当てて～	大野 直子	昭和女子大学大学院博士前期課程	研究	本研究はある学校外英語プログラムで学ぶ小学3～6年生を対象に学習方略と英語運用能力の変化を調査したものである。研究協力者は夏休み中6日間のイマージョンプログラム参加者と非参加者から成り、参加前の5月と半年後の1月にTOEFL Primaryで英語運用能力を測定、SILL(Oxford 1990)に基づく学習方略の質問紙を作成、調査を行った。結果、英語運用能力と学習方略の補償ストラテジーは相関し、その傾向はプログラム参加者に強いことが判明した。	